

学校だより 熱 砂

＜発行＞
令和5年3月10日
発行責任者：
校長 和田 政男

3月10日、令和4年度小学部第42回、中学部第37回卒業証書授与式

3年前の卒業式は、コロナパンデミックのため、当局から急遽翌週からの休校と、集会の禁止を指示されました。その施行前に行おうと、数日予定を早め、卒業生と保護者、来賓のみの卒業式を急遽行いました。一昨年、昨年オンライン中継の卒業式だったり、在校生が会場にいない卒業式だったり、その都度許容される範囲の卒業式を工夫して行いました。今年は、4年ぶりに規制のない卒業式ができ、普通に生活できることの有難さを感じたところです。

数日前から校内はお別れムードが漂い、学年ごとやブロックごとに年度の終わりを締めくくるイベントが行われていました。8日には、帰国する派遣教員への卒業証書授与式をサプライズで代表委員会が企画してくれました。

そのようなムードの中で迎えた卒業式当日。厳かな中にも温かみのある、とても良い卒業式になりました。「卒業式は最後の授業」と教員たちの中でよく話されますが、卒業学年の学級担任の指導は行き届き、在校生も精一杯先輩の門出を祝おうと、姿勢正しく式に臨んでおりました。ご来賓からの祝辞は温かく、卒業生の前途を祝し、未来に向けて漕ぎ出そうとする若者を鼓舞する内容でした。

そのようなDJSでの最後の日を過ごし、思うようにいかないことの多い、力のない校長ではあったけれど、この学校に赴任できて幸せだったとつくづく思いました。何とか責任を全うできたのも、本当に皆様の支えがあったからこそ、ここより感謝しております。

今後の皆様のご多幸と、DJSの益々の発展を祈りつつ、令和4年度のDJSを閉じます。ありがとうございました。

最期のことば、最後のことば

私の父親は、肝臓がんを患い、私が49歳の時に亡くなった。私が中学校の教頭になり4年目の時だった。私の教頭時代の4年間は、まさに父親の介護と教頭の激務をこなす、とても困難な4年間だった。

病床にある父親の傍に付き添い、父親のうわ言のような様々な言葉を多く聞いたが、意味のある最後の言葉は「教頭だからといって、威張るんじゃないぞ」というものだった。今時、教頭というものが威張れる立場ではないことは誰にとっても明らかだが、昭和一桁生まれの父親にとっては、学校の校長、教頭というものはよほど偉い存在だったに違いない、とその時は思った。あるいは、父親は、息子である私が威張り散らすような人格の人間であると思っていたのだろうか、と疑問にも思った。

でも、今ははっきりと解る。

あれは、子を思う、親の最期の愛情表現だったのだと。(言うまでもないことですが、威張り散らして周囲から煙たがられるのではなく、周囲から愛されて、幸せな人生を歩め、と言うことだったのだろう)

長く病床にあり、はっきりとしない意識の中でも、子の幸せを願っていたのだと。

私は、教え子との別れに際し「和顔愛語の人となれ」という言葉を贈っている。

これも私の教え子たちへの愛情表現の言葉だ。

※ 今日の卒業式の校歌、修了式の校歌は、これまで聞いたことがないほど、子ども達の滂瀾とした声が響く、素敵な校歌だった。そうか、コロナ禍で、体育館にみんなが集まって校歌を歌うのは久しぶりだったのか？それにしても一年の締めくくりに相応しい、素晴らしい校歌だった。

↓ 派遣教員の配偶者会「オアシス」が作成しました。



G9 卒業生→
↓ G6 卒業生



「和顔愛語」を実践することで、その人も周りの人も幸せになれると信じている。

今日の修了式は、私が教員として子ども達の前に立つ、最後の機会だった。最後の言葉は「和顔愛語」で締めくくろう。数日前からそう考えていた。

最後の言葉には愛がにじむ。